

Newsletter

2026.7.24

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

外国語教育研究センター長就任の挨拶

TOPIC 1

2028年度のカリキュラム変更に向け、全カリの言語教育も今まさに大きな変革期を迎えています。各個人の持つ様々な言語能力と文化的経験を「複合的な能力」ととらえ、それを育み、尊重する——。この立教の「複言語・複文化」教育を牽引する外国語教育研究センター（FLER）の新センター長に就任された泉水浩隆教授より、同教育にける熱い想いと就任の挨拶を頂戴しました。

外国語教育研究センター長／教授 泉水 浩隆

2026年4月から外国語教育研究センター長に就任しました泉水（せんすい）浩隆と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。研究分野はスペイン語学（特にスペイン語音声学）およびスペイン語教育です。

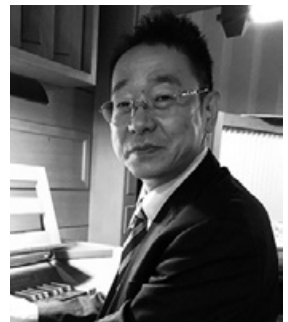
私は幼い頃から音楽が好きで音というものに強い関心を持っていました。また外国語にも興味があったのですが、そこでもやはりさまざまな言語の音が気になりました。とりわけロマンス諸語の響きが性に合ったらしく、その一つであるスペイン語を専攻し、かつ、その音声を研究することになって今に至ります。ちなみに音楽もずっと続けており、今でも電子オルガン（ポピュラー）とオルガン（クラシック）を弾いているので（上手下手はさておき）、昔からやっていることは実はあまり変わっていないのかもしれませんが。

私は2023年4月に外国語教育研究センターに着任し、それと同時にスペイン語教育研究室主任に就任しました。それ以来現在に至るまでスペイン語教育研究室主任を続けておりますが、今回それに加えて外国語教育研究センター長という役目も担うことになりました。向き不向きという点から見ると、私自身は自らがこうしたポジションに向いているとは決して思いませんし、立教大学に来てから4年目に入ったばかりでこのような立場に立つことになるとは予想もしておりませんでしたので、あたふたするばかりの毎日が続いております。

私の主たる担当科目はスペイン語ですが、英語以外のいわゆる「第2外国語」（ご存じの通り、立教大学では「言語B」と呼ばれています）は、正直なところ我が国の大学という場においては残念ながら近年必ずしも旗色がよくありません。「第2外国語」を必修として学ぶ必要がなくなったり、開設されている言語種が減らされたりなどというケースもままあります。そのような中で、すべての学部・学科で「言語B」が必修になっているという点は、「複言語・複文化」を重視する立教大学の教育における一つの象徴的特長と言えます。さらに言語そのものを学ぶことだけでなく、どまらず、「複言語・複文化科目」を設置し、学生の皆さんに複数の言語や文化に触れる意義やその重要性を考える機会を提供しているのは、言語そのものの教育と言語を支える（あるいは言語に支えられる）文化や社会的知識の教育が表裏一体であることを具現化していると言えるでしょう。「言語B」と並んで、「言語A」（英語）においても現在2028年度のカリキュラム変更に向けて担当の先生方が、いまという時代に求められている言語能力の涵養に十分応じることのできる科目構成および内容へとさらにグレードアップさせられるよう日々邁進されています。このように「言語A」「言語B」「複言語・複文化科目」が有機的に結びつき、立教大学の言語教育が新たなステージに進んでいくことが期待されます。

いま言及した「複言語・複文化科目」ですが、これは昨年度から全学共通カリキュラムの総合系科目の一つとして導入されたものです。総合系科目の中にはこれまでも、例えば「スペイン語圏の社会」のように、特定の言語圏の文化や社会を知るための科目はありましたが、「複言語・複文化」にフォーカスをあてた科目の開講は初めてのことになります。池袋キャンパス・新座キャンパスで同名の科目「なぜ外国語を学ぶのか？」が開設されており、僭越ながら初年度から私もその一方を担当させていただいています。言語そのものを教える科目とは異なる視点から言語関連の話題を扱う科目を担当することになり、私は言語の持つ多様性や普遍性、興味深い特性、言語に対して普段あまり考えたことのなかった見方を受講生の皆さんに伝えようとしています。一方で、毎回提出してもらっているリアクションペーパーでは思いもよらなかった着眼点を提示されることもあり、担当者としてとても楽しく読ませていただいています。来年度からは「複言語・複文化」に関するゼミナール科目も開講される予定になっていますので、「複言語・複文化」を考える機会がさらに増えるものと考えております。

どのような学問分野を修めるにしても、理にかなった形で論理展開を行い、また、海外での動向も踏まえて研究を進めるためには、専門分野の学業を支えるためのしっかりとした言語運用能力が不可欠です。そのような言語運用能力を身につけられるプログラムを提供することができるよう、今後もFLERの教員一同たゆめぬ努力を続けていきたいと考えます。言語能力は短時日に急激に伸びる性質のものではありませんので、長期的視点をもって皆さまからの暖かいご支援を賜ることができれば、これに勝る喜びはありません。



TOPIC 2

高年次教養教育の充実に向けて ～2028年度開講「完成期クロス領域ゼミナール」の紹介～

「自分の専門知識は、他分野の目から見るとどう映るのだろうか?」「異なる視点がぶつかり合ったとき、どんな新しい解決策が生まれるか?」——そんな、学部学科の枠を超えた熱い対話と未知なる探究の場が、いよいよ始まります。本学では、2028年度からの全学的な教育改革「RIKKYO Learning Style 第2ステージ (RLS 2.0)」に向け、高年次生（完成期）向けの教養教育の充実を最重要課題の一つとして位置づけています。これまでの「立教ゼミナール発展編」の成果を継承・発展させた新科目「完成期クロス領域ゼミナール」では、主に以下の3つの力を養うことを目指します。

- 多角的な視野：異分野の視点を取り入れ、複雑な社会課題を多角的に捉える力
- 探究力：対話を通じて自ら問いを立て、批判的に検討する力
- 未来への展望：学んだ専門知識を社会や将来のキャリアへつなげる力

本号では、新科目のスタートに向けて、教員視点での気になるポイントや充実した授業支援制度について、Q&A形式で分かりやすく解説します。

完成期クロス領域ゼミナールの特徴



異分野の教員による「2名体制」

異なる専門分野を持つ2名の教員が協働して授業を運営。全回の授業に両名が出講し、学生の探究を深く支えます。



柔軟な授業形態

対面、オンラインから選択可能。キャンパス間連携や高年次生の履修しやすさを考慮し、オンライン型の活用を推奨しています。日帰り・宿泊型のフィールドワークも実施可能です。



手厚い授業補助・サポート体制

審査を経て1科目あたり最大10万円の予算(教材費、フィールドワーク諸経費等)を申請可能。さらに、グループワーク等を補助する「MiddleTA」を1名採用し、TAと協力した授業運営を行うことが可能です。

不安を解消するQ&A①

Q 関心のある他学部・他分野の教員を探すのを支援する仕組みはありますか？

A あります。教員個人のつながりだけに頼らないよう、全学共通カリキュラム運営センターがマッチングを支援します。研究分野や関心領域を可視化するためのアンケート実施や、コーディネート体制の整備を進めていきます。

Q 学外の専門家をゲストスピーカーとして招くことはできますか？

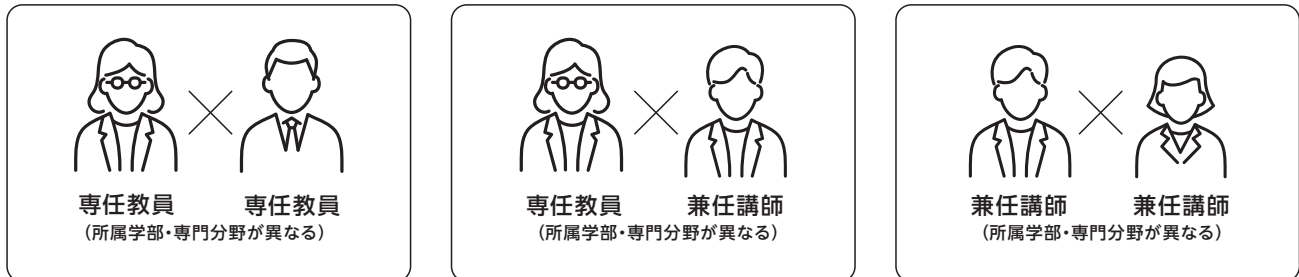
A 可能です。多様な知見を授業に取り入れるため、最大4枠までゲストスピーカーを招聘することができます。1科目あたり最大10万円の予算サポート（審査あり）と合わせて、ぜひ充実した授業企画にご活用ください。

Q 授業にはどんな学生が参加しますか？

A 主に3・4年次生を想定しており、定員は原則30名です。また、国際共修の場として特別外国人学生の枠外履修（2名まで）も新たに認める方針です。

開講可能なペア(※専門分野が異なること)

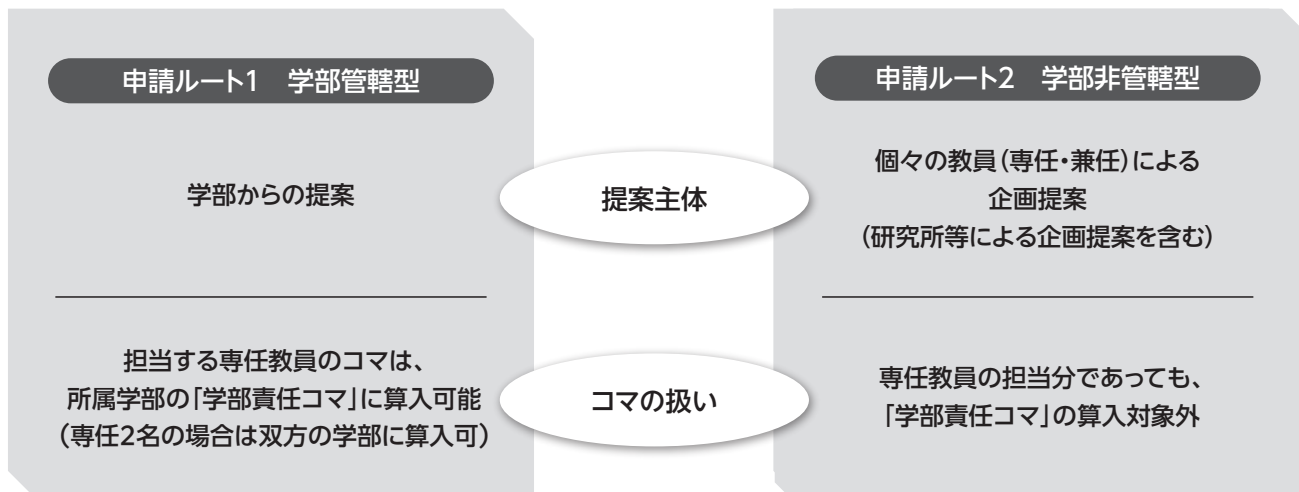
「異分野の2名」の具体的な組み合わせパターンは以下のとおりです。



※特別専任教員は「専任教員」に含まれるため担当可能です。
 ※任期制教員(特任教員・助教)は担当できません。

2つの科目申請ルート

科目の申請ルートは以下の2つから選ぶことができます。



不安を解消するQ&A

- Q 学部管轄型で開講する場合、同じ専任教員ペアでずっと継続しなければなりませんか？
- A いいえ、その必要はありません。学部管轄型は「科目(企画)自体」を常設するものですが、年度ごとの事情(サバティカルや出張など)による担当教員の交代や、3年を目安に内容を見直すことも可能です。また、事情により一時的に休止し、従来の「立教ゼミナール」に切り替えるなど柔軟な運用が認められています。
- Q 現在「立教ゼミナール発展編」を担当していますが、今後の手続きや開講はどうなりますか？
- A 現在の「立教ゼミナール発展編」は2027年度まで従来通り開講されます。2028年度以降は、「完成期クロス領域ゼミナール」または、「立教ゼミナール」(次のQAを参照)への申請をご検討ください。
- Q 新制度において「立教ゼミナール」自体はどのように変わるのですか？
- A 主に1～3年次を対象とした「形成期科目」としての役割が明確化されます。従来の学部管轄による開講に加え、個人の企画で応募・開講できる「個別教員提案型」ルートが新設され、より多様な先生方に担当いただけるようになります。ゲストスピーカー枠や図書資料購入補助費などの授業補助制度は現行のまま変更ありません。

より詳細な募集要項は
こちらよりご確認ください。



TOPIC 3

AIを学びのパートナーに！ ～「全カリ英語科目におけるAI使用ガイドライン」～

近年、生成AIの急速な進展に伴い、大学授業におけるAIの指導や活用方法が共通の課題となっています。こうした背景を受け、本学の英語教育研究室では、「全カリ英語科目におけるAI使用に関するガイドライン」を策定しました。

本ガイドラインは、1年次対象の全英語必修科目および英語自由科目を対象としており、AIの使用を一律に禁止するのではなく、「責任ある、倫理的で教育的な利用」を促進することを基本方針としています。教員への「推奨実践」として判断が委ねられるとともに、学生自身が批判的・倫理的な視点を持ってAIと向き合い、自らの知的成長に役立てていくための指針となっています。

今回策定されたガイドラインは、大きく3つのパートに分かれており、それぞれの役割や具体的な使用方法が明示されています。ここからは、それぞれのパートがどのような内容になっているのか、詳しく見ていきましょう。

General Principles 一般原則

The English Language Program (ELP) recognizes that artificial intelligence (AI) technologies are increasingly used in academic and professional environments. The program therefore adopts a policy that promotes responsible, ethical, and educational uses of AI tools rather than prohibiting them.

英語教育研究室（ELP）では、AIの使用を禁じるのではなく、責任ある、倫理的で教育的な利用を促進する方針を採用し、1年次対象の全英語必修科目およびELP提供の英語自由科目を対象としたAI活用ガイドラインを定めました。

【Purpose 目的】



Support teachers to manage AI use within their classes

教員によるAI活用の適切な管理を支援



Encourage the ethical and responsible use of AI tools within the ELP

倫理的で責任ある利用を促進



Support teachers to develop students' AI literacy skills

学生のAIリテラシーの育成



Ensure that AI aids language learning and intellectual development

学習と知的成長に役立てる

【Basic Policy 基本方針】

- ・ AI must not replace students' own thinking, participation, or academic work.
AIは学生自身の思考、参加、または学業上の成果を代替してはならない。
- ・ Students remain entirely responsible for the work they submit and for the accuracy and integrity of any AI-assisted content.
提出する課題については、最終的な責任はすべて学生本人にある。

【Three General Principles 3つの基本原則】



AI as a Learning Support Tool

学習の
サポートツール



Student Responsibility and Authorship

学生の責任と
作成者としての自覚



Ethical and Transparent Use

倫理的かつ透明性の
ある使用

Responsibilities of Teachers and Students 教員と学生の責任

Teachers design assignments that discourage overreliance on AI, while students remain mindful that AI may produce incorrect information and use the "AI Use Declaration Form" to ensure transparency.

教員は適切な課題設計を行い、学生はAIの誤りに注意しつつ、「AI使用に関する申告書」で透明性をもって利用します。

Teacher Responsibilities 教員の責任

- ☒ Show students how to use AI tools in ways which are effective and ethical
AIツールを効果的かつ倫理的に活用する方法を学生に示す
- ☒ Demonstrate both the strengths and limitations of AI tools
AIツールの長所と限界の両方を学生に示す
- ☒ Emphasize learning processes rather than final products
最終的な成果物だけでなく、学習の過程を重視する
- ☒ Design assignments that discourage overreliance on AI
学生がAIに過度に依存しないような課題を設計する



Student Responsibilities 学生の責任

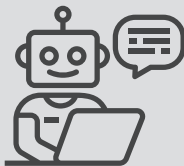
- ☒ Follow instructor-specific policies regarding AI use
AIの使用に関して、各担当教員が定める方針に従う
- ☒ Recognise that AI tools may produce incorrect or misleading information
AIツールが誤った情報や誤解を招く内容を生成する可能性があることを理解する
- ☒ Verify the accuracy of AI outputs
AIが出力した内容の正確性を自ら確認する
- ☒ Avoid the input of personal or sensitive information into AI tools
個人情報や機密性の高い情報をAIツールに入力しない
- ☒ Ensure that submitted work reflects their own understanding
提出物が、学生自身の理解を反映したものであるようにする
- ☒ Be transparent about how AI tools were used when required
求められた場合には、AIツールをどのように使用したかを明示する



Suggested Uses of AI 推奨される使用方法

It clearly outlines what is allowed and not allowed for language development, such as checking grammar and vocabulary, or revising presentation scripts.

語彙や文法のチェック、プレゼンテーションのスクリプト修正など、言語能力を伸ばすための具体的なOK・NGラインが示されています。

AI Usage AIの使い方	Degree of Permission 許可の度合い
- Checking grammar or vocabulary after a text has been written テキスト作成後の文法や語彙のチェック - Practicing debate speeches or presentations and receiving feedback プレゼンテーションやディベートの練習とフィードバック - Generating visual materials for presentations プレゼンテーション用の視覚資料や画像の生成 	Generally allowed 原則として可 
- Using AI to find sources or information that are then checked for accuracy 文献や情報を探し、その正確性を検証する - Brainstorming ideas for assignments 課題のアイデアをブレインストーミングする - Using AI during tests or in-class assessments テストや授業内の評価中にAIを使う 	Allowed if permitted by the instructor 教員の許可のもと可 
- Asking AI to write essays, speeches, presentations, arguments, etc. AIにエッセイ、スピーチ、プレゼンテーション、論述などを書かせる - Submitting any AI-generated text as one's own work (i.e., without attribution) AIが生成したテキストを自分の成果として提出する 	Not allowed 許可しない 

Declaration form for use of AI tools AIツール使用申告書

Students are required to truthfully disclose their use of AI by submitting the AI Use Declaration Form.

AI Use Declaration Form (AIツール使用に関する申告書)を用いて、学生にAIの使用を正直に申告してもらいます。

I used AI tools to generate ideas for my assignment 課題のアイデアを出すためにAIツールを使用しました	Yes / No
I used AI tools to proofread my assignment 課題の校正のためにAIツールを使用しました	Yes / No
I used AI tools to find sources for my assignment 課題作成のための資料を探すためにAIツールを使用しました	Yes / No
I used AI tools to write sentences for my assignment 課題の文章作成のためにAIツールを使用しました	Yes / No
I used AI tools in ways other than those described above 上記以外の方法でAIツールを使用しました	Yes / No

The full version of the AI Guidelines is available below:

今回紹介したAIガイドラインの詳細は以下リンク先よりご確認ください。

AI Guidelines
AIガイドライン



Academic dishonesty
不正行為について



Declaration form for
use of AI tools
AIツール使用申告書



2026
年度

全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2026年6月現在

全カリ委員会				
役 職 名	氏 名	所 属		
部 長	井川 充雄	社	メ社	
副部長	森本 正和	理	化	
チーム リーダー	森平 崇文	外国語教育研究 センター		言語チーム
	河村 賢治	法	法	総合チーム
運営センター 委員	加藤 磨珠枝	文	キ	文学部長
	池田 毅	済	済	経済学部長
	山田 康之	理	生	理学部長
	砂川 浩慶	社	メ社	社会学部長
	松井 秀征	法	政	法学部長
	千住 一	観	交	観光学部長
	木下 武徳	福	政	コミュニティ福祉 学部長
	有馬 賢治	営	営	経営学部長
	篠崎 誠	現	映	現代心理学部長
	森 聡美	異	異	異文化 コミュニケーション学部長
	加藤 晴康	ス	ス	スポーツウエルネス 学部長
	小林 潤司	環	環	環境学部長
	泉水 浩隆	外国語教育研究 センター		外国語教育研究 センター長
	新田 啓子	文	英	教学支援機構長

言語教育研究室			
研究室名		氏 名	所 属
英語	主任	町 沙恵子	外国語教育研究センター
		シュロスブリー 美樹	
		三浦 愛香	
		上野 育子	
		アスキイス スティーブン	
		モリス サミュエル	
ドイツ語	主任	坂本 真一	
		牛山 さおり	
フランス 語	主任	河野 美奈子	
		ドナシメント アントニー	
スペイン 語	主任	泉水 浩隆	
中国語	主任	南雲 大悟	
		森平 崇文	
朝鮮語	主任	金 恩愛	
		佐々木 正徳	
ロシア語	主任	森平 崇文	
諸言語	主任	森平 崇文	

総合系科目構想・運営チーム				
役 職 名	氏 名	所 属		担 当
リーダー	河村 賢治	法	法	
メンバー	四日市 康博	文	史	人文学
	田口 真	理	物	自然科学
	湊 照宏	済	済	社会科学
	大山 載吉	現	映	社会科学
	奇二 正彦	ス	ス	スポーツ人間科学

全カリサポーター				
	氏 名	所 属		グループ*2
学部 選出	澤入 要仁	文	文 (英)	人文学系
	藤原 新	済	済	社会科学系
	田口 真	理	物	自然科学系
	太田 麻希子	社	現	社会科学系
	鳥村 暁代	法	国ビ	社会科学系
	辻 和洋	営	営	社会科学系
	山田 優	異	異	人文学系
	大橋 健一	観	交	社会科学系
	走井 洋一	福	福	社会科学系
	山田 哲子	現	心	人文学系
	石渡 貴之	ス	ス	スポーツ人間科学系
	西林 勝吾	環	環	自然科学系
	総長 任命	木村 自	社	現

言語系科目構想・運営チーム			
役 職 名	氏 名	所 属	担 当
リーダー	森平 崇文	外国語教育研究センター	
メンバー	町 沙恵子		英語
	坂本 真一		ドイツ語
	河野 美奈子		フランス語
	泉水 浩隆		スペイン語
	南雲 大悟		中国語
	金 恩愛		朝鮮語
	森平 崇文*1		ロシア語
	森平 崇文*1		諸言語

全カリニュースレター No.62

*2 サポートグループ

人文学系サポートグループ
社会科学系サポートグループ
自然科学系サポートグループ
スポーツ人間科学系サポートグループ

*1 言語チームリーダーとの兼務

*2 サポートグループ / 人文学系サポートグループ
社会科学系サポートグループ
自然科学系サポートグループ
スポーツ人間科学系サポートグループ

全カリニュースレター No.62
発行 2026.7.24
発行人 井川 充雄
編集人 河村 賢治、上野 育子
発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター